まちの図工室で広がる、つくる楽しさ

桔梗が丘中学校美術部6人が体験

木片に描いた個性、壁面アートの一部に

『まちの図工室』名張市には各地区に「街づくり委員会」や「まちの保健室」があり、住民同士の支え合いを実現してきた。これは前亀井市長の時代から「共生社会」をテーマに、コミュニティを築いてきた20年以上の成果であり、名張市は全国でも珍しく先進的な「まち」なのである。この名張市に共感・賛同したのが、東京芸術大学、長岡造形大学、企業や地方公共団体等で構成する「ＡＲＴ共生拠点」プロジェクト。

「アートやものづくりを通して交流する拠点」として出来たのが「まちの図工室」である。長岡造形大学は本格的に取組み、山口貴一助教(41)が家族とともに名張に引っ越し、管理人として活発に活動している。

名張市木屋町で１００年間愛されてきた「パールクリーニング店」が２０２５年3月から生まれ変わって「まちの図工室」になった。中に入ると、壁一面に広がるシンボル「つくる・つながる・とける・るるる」に目が引きつけられる。木片に絵や文字を自由に描いて壁に貼り付ける参加型のアート。これはどんどん増殖している。

自分の作品がここにあることで、親しみが倍加する。創設以来、長岡造形大学の学生達が度々名張に来て市民と話し合い、ワークショップで交流し研究発表につなげている。また、さまざまな市民のワークショップに利用されて知られてきた。最近では、思いついたようにやってきて絵を描き、シリーズ作品として残す人がいたり、母親と来た幼児が作品作りを楽しんでいたりする。水力発電の模型を作って置いていった男性がいるなど、身近な「まちの図工室」として親しまれてきた。

【桔中美術部】昨年10月18日、名張市立桔梗が丘中学校美術部の生徒6人（1年生2人、2年生4人）が、顧問の山田篤志先生に引率されて、体験にやってきた。山口助教の説明を聞きながら、中を見学した。絵画に関わる用具だけでなく、さまざまな道具があり、レーザー加工機まで揃っているのに感心していた。それから10㎝角ぐらいの木片に絵を描いた。美術部だけにみんな上手い。描いている生徒達に話を聞いた。大内彩乃さん（2年）は「美術部の自由な雰囲気で、益々絵が好きになった」。正木柚月さん（2年）は「自分の言葉で話すよりも、絵で表現するのが好き」。副夽（そえまつ）ゆいさん（2年）は「絵を描いていると、嫌なことを忘れる」。齋藤未陽（みはる）さん（2年）は「イラストレーターになりたい」。脇坂一花（いちか）さん（1年）「絵が大好き。将来は花火師になる」。村田智彩（ちさ）さん（1年）は「家に帰ってもずっと描いている」と話してくれた。みんな本当に絵が好きのようで、個性に溢れ、生き生きした絵が完成した。6人の絵と、山田先生の絵は「つくる・つながる・とける・るるる」壁面上部の目立つところに貼り付けられた。

桔梗が丘中学校美術部員がそれぞれの今の思いを作品にした

後日生徒らに感想文を書いて貰った。「木の板に絵を描けてとても楽しかった」「入った瞬間、目に入ったのが壁面いっぱいの木の絵。自分もそれが出来てめっちゃ楽しかった」「山口先生の話を聞いて、さまざまな美術や芸術の道があることを知った。美術のみちを歩みたい気持ちが益々強くなった」など、有意義な訪問であったことが窺われた。

山口助教は「壁面に自分の作品があることで、この図工室がぐっと身近な場所になったと思います。思い立ったらいつでも遊びに来て下さい」と話していた。

「つくる・つながる・とける・るるる」